



フレンドシップ事業 (教育実践基礎演習/2年次)



香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.2



研究交流会・公開講演会(2015.08開催)



TOP NEWS

Topic-1 平成28年度も研究交流会を開催予定です！

平成28年8月、昨年度から開催を始めた研究交流会を、本年度も引き続き開催する予定で、現在準備を進めています。

【日 時】平成28年8月6日(土) 13:00~17:00(予定)

【場 所】オリーブ・スクエア(本学幸町北キャンパス内)

【内 容】はじめまして交流会、ワークショップ、講演 など

詳細が決まりましたら、当センターホームページに情報掲載します。また本紙8頁に昨年度 研究交流会の記事を掲載しておりますので、併せてご参照いただければと思います。(※上・左写真は昨年度の様子)

Topic-2 平成28年度 フレンドシップ事業 かたちを変えて始動！

当センターが主管実施しているフレンドシップ事業。昨年度まで、附属坂出小学校の野外教育体験活動の支援などを主な演習として実施してきました。本年度は演習の場を近隣小学校の放課後児童クラブとし、2年次履修学生たちは、5月11日より子どもたちと関わり、子ども理解を深めていきます。(※上・左写真は昨年度の様子)



【特集】第16回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて	2
第16回 学部・附属学校園教員合同研究集会 研究グループ報告	3~7
第2期(10~3月)教育実践集中講座 実践報告	7
平成27年度 センター公開講演会 報告	8
附属坂出小学校 第98回 教育研究発表会 報告	9
附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎 初等教育研究発表会 報告	10
第18回 附属特別支援学校 教育研究発表会 報告	11
第60回 附属幼稚園研究大会 報告	12
退任のご挨拶/着任のご挨拶/寄贈図書	13~15
教職支援開発センター活動報告/教育実践総合研究(第33・34号)原稿募集	16

第16回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

附属教職支援開発センター センター長 七條 正典



平成28年3月1日(火)第16回学部・附属学校園教員合同研究集会が、611講義室・オリーブスクエアを会場に、180名(学部79名、附属学校園101名)の参加を得て、盛大に開催されました。



全体会冒頭の挨拶の中で、毛利猛学部長から、これまでの香川大学教育学部と附属学校園の共同研究の歩みについて、①「学部・附属学校園共同研究機構」設置の趣旨や、これまでの共同研究プロジェクトの採択数等について、また、②「学部・附属学校園教員合同研究集会」が発足してから今日までの参加の状況や全体会・分科会の主なテーマなど、その経緯を振り返り、取組の成果について述べられました。

全体会の進行は附属坂出中学校の若林教裕先生が、全体討論のコーディネーターは附属教職支援開発センターの七條が務めました。

全体討論のテーマは、①「来年度からの学部・大学院の組織及び指導体制」として、学部・大学院の改革及び教職大学院について、学務委員長の平先生、総務委員長の加野先生、教職大学院専攻長の有馬先生からそれぞれ説明があり、学部・附属学校園教員の共通理解が図られました。その後、②「教育実習をめぐる現状と課題」をテーマとして、まず、実地教育委員長の松村先生から、学部で検討している教育実習の履修が困難な学生に対する特例措置について説明がありました。



次に、附属坂出小学校の樽本副校長先生から、実習において、学生を教育界全体の宝として、また附属チームの一員として、しっかりと指導力を身に付けさせるとともに、信用失墜行為等教師として守るべき事柄についても教えることの大切さについて述べられました。そして、附属高松中学校の赤熊副校長先生は、教職についての理解不足が課題であるとして、その解決の方策として、学生ボランティアの通年化や「香川大学附属学校教員免許」の発行など新たな提案をいただきました。これらの提案について、賛同の意見もいただくなど、教育実習の課題について共通理解を図る貴重な場となりました。

この後の分科会では、オリーブスクエアを会場として、16の共同研究プロジェクトの成果発表があり、それぞれの場において熱心な意見交換がなされました。

その後、大学会館のソラミにおいて行われた懇親会には115名の参加があり、和やかで楽しい親睦のひとときを過ごすことができました。



研究グループ報告

① 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究—ICTを活用した支援の方法の開発—

佐藤明宏、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中、附属特別支援

読むこと・書くことの言語力は国語科のみならず、全ての教科の基礎学力となる。そういう子どもたちに、これらの学習基礎力となる読むこと・書くことの学力を保障するための指導方法を開発していこうと考え、これまで継続研究に取り組んできた。

今年は、特別支援を必要とする子どもの言葉の力を伸ばすための有効な教育方法としてのICTに着目し、ICTを活用した支援の方法の開発に取り組むこととした。ただ、各学校で、まだまだ機器が揃っていない中でのICT活用のあり方としては視覚的な情報提示（学習意欲の喚起）ということが主になったが、今後はICTが眼鏡や電卓のように子どもが自ら操作できるような子どものツールとなることを目指していきたい。



② 異学年集団における児童の相互作用と教師の支援のあり方に関する研究

—発話データを用いた分析—

岡田 涼、附属高松小

附属高松小学校では、平成25年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、新領域『創造活動』を核とする新たな教育課程の開発に取り組んでいる。本研究では、異学年集団による縦割り創造活動での教師の支援のあり方について、教師の発話パターンから検討した。その結果、児童に適切なヒントを示したり、問題解決のレベルを調整するなど有能感の支援が多くみられた。また、児童と一緒に楽しんでいることを示したり、児童への気遣いを示す関係性の支援もみられた。縦割り創造活動において、教師は多様な支援を行うことで、異学年集団の問題解決を支えていることが示唆された。



③ 食育に重点を置いた「香川版食育かるた」の開発

加藤みゆき、附属坂出中

現在の香川県民および児童生徒に関する食生活の問題点を明らかとした。問題点を解決するために食育に重点をおいた「かるた」を開発した。開発した「かるた」は、食生活の改善と香川の地産・地消を取り入れた「かるた」とした。取り札と読み札については、取り札の後ろに生徒の食育のための一言を記載した。指導用の教師用として「かるた」の解説をすべての「かるた」に作成し、教師の食育活動の補助資料とした。発表会后に作成した教師用に解説を附属校に配布し、今後の食育教育への活用をお願いした。



④ 思考ツールを活用した論理的表現力の指導法についての研究

—ピラミッドチャートで登場人物の心情を説明しよう—

山本茂喜、附属高松中

今年度は、思考ツールの内、特にピラミッド・チャートを活用した国語学習の方法について共同研究を行った。今回の実践では、特に交流や対話における思考ツールの有効性が明らかになった。これまでの成果をもとに、昨年夏には東洋館出版社より、山本茂喜編著『ビジュアル・ツールで国語の授業づくり』を公刊することができた。これまでのご支援に深く感謝する次第である。また、研究会当日は貴重なご意見・ご質問をいただくことができた。来年度以降もさらに共同研究を深化させるとともに、三冊目となる研究書を出版したいと考えている。



⑤ 地域学習のカリキュラム開発を支える学問的知見について —附属高松中学校における授業実践を通して—

鈴木正行、附属高松中

地域学習のカリキュラム開発を支える学問的知見を明らかにするとともに、社会科教員養成における教育内容の改善に資することを目指した。分析の対象とした実践事例は、池田良・小野智史による社会科（歴史的分野3年「軍国主義と日本の行方」、1年「古代までの日本」）及び「新領域プラム」における地域学習（2年「四国遍路とお接待実習」、1年「身近な水環境—出水を探る—」）である。両教諭が作成した指導計画・学習指導案に含まれる要素を、①歴史学、②地理学、③民俗学・神話学、④政治学・法律学、⑤経済学、⑥社会学、⑦哲学・倫理学、⑧社会科教育学、⑨その他（環境学、観光学など）の9つのカテゴリーに分けて取り出し、実践の基盤となる学問的知見を析出した。



当日の発表会では、地域学習のカリキュラム開発及び実践には、(1)社会学が現代社会の課題を捉える上で重要であり、現代社会に対する問題意識が影響すること、(2)歴史学（地域史）と地理学（地域調査）に関する知識と方法が基礎的な学問的知見となること、(3)経済学、哲学、倫理学などの学問領域は、テーマや内容によって重要度が左右されること、(4)政治学・法律学などは、地域社会への政策の提案や社会参画に関わる学習へと発展する際に必要とされること、(5)個別的な学問領域を超えた学際的なアプローチを行う必要があること、(6)社会科教員養成においては地域学習の実践的学習計画の作成が重要であること、などが明らかになったことを報告した。

⑥ 中学校国語科における「思考ツール」を使った「書くこと」の授業の実践的研究

山本茂喜、附属坂出中

我々はこれまで継続して、思考ツールを活用した国語学習のあり方について実践研究を行ってきた。今年度は、ピラミッドやベン図、ツリー図などの思考ツールを活用した書くことの指導の方法について共同研究を行った。これまでの成果をもとに、昨年夏には、東洋館出版社より山本茂喜編著『ビジュアル・ツールで国語科授業づくり』を公刊することができた。また今春には、川田英之著『自己の「物語り」をつむぐ国語授業』（東洋館出版社）が出版された。随所に共同研究の成果が織り込まれており、共同研究担当者としては三冊目の研究書となる。これまでのご支援に深く感謝する次第である。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと思っている。



⑦ 道徳授業における情報モラル教育の資料分析と開発

植田和也、七條正典、黒田勉、松下幸司、山本木ノ実、谷本里都子、附属高松小、附属坂出小

情報モラル教育として、道徳の時間に使用する読み物資料の分析と小学校高学年を想定した資料づくりに取り組んできた。分析においては、特に、学習指導要領における情報モラルに関する記述の整理、情報モラルに関する最近の動向と国における調査結果の分析、各県教育センター等で公開されている情報モラル教育の教材や資料に関しての全国の検索を行いその内容と各県等での現状や違いの整理等である。また、小学校高学年を想定した資料づくりでは、場面設定の構想や実際に児童にアンケートを実施して資料作成を行ってきた。

当日の発表では、学習指導要領における情報モラルの記述の概要と実際の掲載資料の関係や特徴を説明するとともに、開発してきた資料内容について解説した。そして、道徳の資料と技術科での記載内容との違いや児童に対するアンケート結果の分析等について質問があった。

(図：情報モラル指導モデルカリキュラム表（部分抜粋）)

＜大目標・中目標レベル＞			
分類	L1: 小学校1～2年	L2: 小学校3～4年	L3: 小学校5～6年
1. 情報社会の構想	a1-3 発信する情報や情報社会での行動に責任を持つ	a2-1 相手への影響を考慮して行動する	a3-1 他人や社会への影響を考慮して行動する
2. 情報社会の活用	b1-3 情報に関する自分や他者の権利を尊重する	b2-1 人の作ったものを大切に	b3-1 情報の権利があることを知り、尊重する
	c2-3 情報社会でのルール・マナーを遵守できる	c2-1 情報の取扱いや利用に責任を持つ	c3-1 安心・安全・安心に責任を持つ
3. 安全への配慮	d1-3 情報社会の危険から身を守ることに、不適切な情報に対応できる	d2-1 信頼に置かれた大人に伝える	d3-1 信頼される情報の内容に責任を持つ
	d1-1 大人と一緒に使い、信頼に置かれた大人に伝える	d2-2 不適切な情報に当たったときは、大人に意見を求め、適切に対応する	d3-2 不適切な情報であるものを見つけたら、適切に対応する

⑧「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの開発

松本博雄、松井剛太、片岡元子、附属幼稚園

昨年度から試みを始めた子ども向けクラスだより「〇〇ぐみしんぶん」によるアクションリサーチを継続し、今年度は、①子どもの遊びの質、②保育者のかかわりの質という2点からその効果と課題を検討した。3歳児クラスでは、写真を掲載された嬉しい気持ちが安心へとつながったり、「しんぶん」を介して友達や他の遊びへとつながったりしていくことが見出された。5歳児クラスでは、自ら「しんぶん」の作り手となったり、自分の遊びの動機付けとなったりする姿も見られた。このことから、保育者にとって「しんぶん」作りは、翌日の環境構成や援助を考える有効なツールとなることがわかった。今後は、この「しんぶん」を職員室にも掲示することにより園内研修に活用し、新たな可能性を探究していきたいと考えている。

(写真：あおぐみしんぶん)



第16回
学部附属教員合同研究会
研究グループ報告

研究グループ報告

第2期
教育実践集中講座
実践報告

平成27年度
センター公開講演会
報告
附属坂出小学校
第98回教育研究発表会報告

第18回
附属特別支援学校
教育研究発表会報告

第60回
附属幼稚園研究大会
報告
退任のご挨拶
着任のご挨拶
寄贈図書

退任のご挨拶
着任のご挨拶
寄贈図書

⑨「新たな学び」を支える社会科教員の力量形成方略の創造と展開

—附属学校を地域連携により「学び続ける教員」の場にして行くことを通して—

伊藤裕康、附属坂出中

大量採用により新規採用時にある程度の実践的指導力が求められる。さらに、高度化・複雑化する諸課題への対応から、教員には「新たな学び」を支える実践的指導力も必要である(2012.4、中央教育審議会答申)。中教審答申では、大学と教育委員会と連携しての教職生活全体を通じた一体的な改革による「学び続ける教員」を支援する仕組みの構築を求める。

附属学校を会場に、学部生や大学院生、卒業生をはじめとした香川県の社会科教員が参加できる「学び続ける教員が集う」場を構築して、「新たな学び」を支える実践的指導力のある教員の形成を支援しつつ、「新たな学び」を支える教員の養成方略に関わる基礎的知見を得ようと考えた。本試みは、社研出身者が集い、卒業生のアフターケアの意味もある。

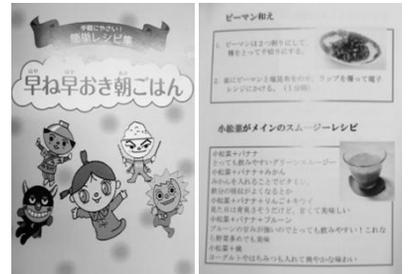


⑩幼稚園児の朝食内容の改善に向けた保護者への働きかけの効果

—レシピ集の作成と配付を通して—

藤元恭子、附属幼稚園

昨年度、直接講話という形で保護者に対して食育指導を行った結果、野菜類、たんぱく源いずれも若干の摂取増加がみられ、一定の成果があったことを報告した。しかし、すべての問題が改善されたわけではなく、継続的に保護者が取り組み易い方策を考えていくことが課題として残された。そこで今年度は手軽に朝食に取り入れられそうな野菜をつかったレシピを集め、冊子にし調査の2週間前に配付するという働きかけを行った結果、メニューに取り入れられ、野菜類、たんぱく源いずれも摂取増加がみられた。しかし、野菜類では40%、たんぱく源では20%程度で摂取ゼロの食事もみられることから、さらなる工夫の必要性が課題となった。当日は、小学校、中学校の先生方からも食の実態を伺うことができ、改めて幼児期の食の大切さを実感した。今後にかかしていきたい。



⑪数学科授業研究における順序思考・俯瞰思考の役割

佐竹郁夫、附属坂出中

本研究は、数学の授業改善・教材開発のために、2つの視点「順序思考」・「俯瞰思考」から授業、調査を実施し、中学校生徒のその思考の存在・様相を明らかにするものである。具体的には、1. 附属坂出中学校で調査問題を実施し、その分析結果を今回発表した。分析結果から、生徒の回答が明確な形で順序思考、俯瞰思考に2分されることがわかった。2. 順序思考、俯瞰思考を踏まえた研究授業を実施した。今回はあえて順序思考タイプの生徒、俯瞰思考タイプの生徒を混ぜてグルーピングした。その結果、タイプの違う思考を互いに理解し合おうという作用が起き、活発な討議がみられた。



12 技術科教育法・内容学演習における学生と現職教員との授業研究の協働

黒田勉、附属坂出中、附属高松中

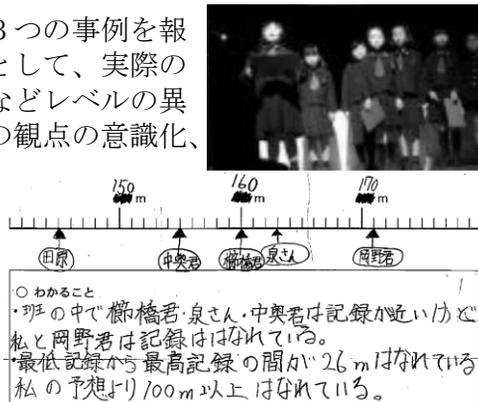
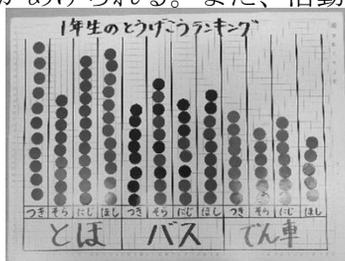
昨年度に引き続き、教員自主研修会「ねじ会」の活動報告と、その時に製作した製作品の展示を行った。昨年度は、展示物が無く、討論・議論が低調であったが、今年度は、製作品の展示も有、活発な討論・議論が行われ、技術分野の意識拡大につながったと考えている。

13 算数教育における統計教育教材の開発研究

—活動事例に基づく教材快活に対する基礎的視点の検討—

長谷川順一、附属高松小

統計的素材をもとに児童が活動する統計的活動についての3つの事例を報告した。事例では児童の主体的活動が見られたが、その要因として、実際のデータの使用に加え、身体的活動、表現活動、グループ活動などレベルの異なる活動によって展開されたことがあげられる。また、活動の観点の意識化、活動時間の確保、活動のための素材の開発、算数と他の教科などでの統計教育のあり方の検討が、今後の課題である。



14 特別支援学校における通院に向けた学校健康診断のあり方に関する検討

—歯科通院に向けた歯科指導の取組について—

恵羅修吉、附属特別支援

知的障害のある児童生徒のなかには、医療機関の雰囲気になじめない、医療行為に対して見通しが持てない等の理由により受診を苦手とする者が存在する。このような児童生徒にとって適切な受診スキルを獲得することは重要な課題である。特別支援学校での健康診断は、受診を苦手とする者にとり受診練習の場となる。本研究では、特に通院支援を要することが多い歯科を取り上げ、従来の支援方法の成果を検証するとともに、子どもの口腔衛生の意識を高める視覚的支援について検討した。研究集会当日は、養護教諭をはじめ多くの方から、ご意見ご質問をいただいた。次年度以降も特別支援学校の保健室活動を高めるため、さらに研究を進めていきたい。



15 タブレットPCを用いた情報学習教材の試作

宮崎英一、附属高松中、附属坂出中

本研究ではタブレットPCからBluetoothを介してサーボモーターの制御を行うシステムを開発した。これはタブレットPCといった我々に身近なICT機器を用いて体験的な学習を行うもので、実空間でのプログラム教育を行う教材としての可能性がある。

当日の研究発表においてはパネルを用いたディスカッションに加えて、本研究で試作した実際のBluetoothを介してサーボモーターの制御を行うシステムのデモンストレーションを行った。その結果、各附属の先生方から技術教育教材以外の新しい教材可能性としての示唆を頂いた。しかし現状のままでは教材として取り入れるには内容的に不十分であり、今後も現場と密接に連携を取りながらの改良を試みる必要がある事も同時に示された。

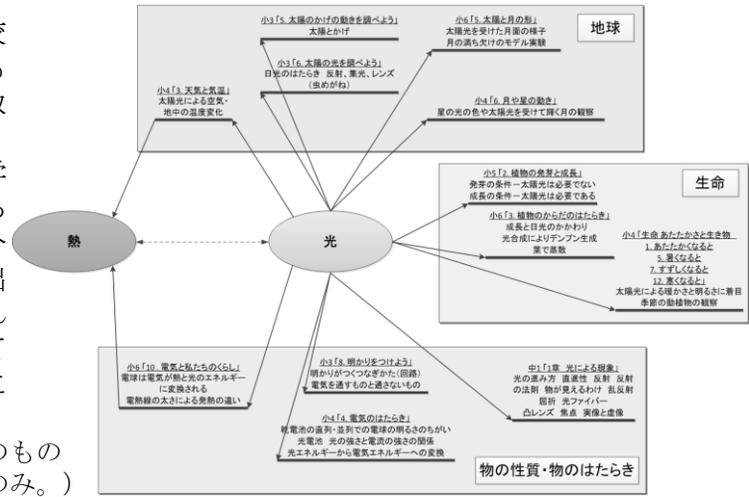


16 光・熱の性質とはたらきに関する授業教材の現代化

高橋尚志、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中

今回理科のメンバーで取り組んだテーマは、2015年が国際光年であったこともあり、「光」である。青色LEDに象徴されるように、私たちを取り巻く光については日々変化し重要性を増している。一方で、光そのものの学習はというと、今回の研究で改めて認識したのだが、小学校3年生で鏡や虫めがねを使って光を集めることをした後は、中学校での反射屈折の取扱いがあるのみである。子ども達が持つ、虹がなぜ虹色かという疑問には、現在の学校教育では答えることができない。ところが、光は電気回路と豆電球、光電池、光合成、月の満ち欠けなどの単元に多数顔を出すのも事実である。今後の研究では、それら各論で出てくる光をどう光の性質としてまとめるか、という方向で検討することになった。

(図：光の小中学校教科書での取扱い。光そのものの学習は、小学校3年、次に中学1年のみ。)



第2期(10~3月)教育実践集中講座 実践報告

プロ教師とは何か? ~教師になるあなたへのエール~

附属教職支援開発センター客員教授 松井 保・藤本 泰雄・山内 秀則

第2期教育実践集中講座では、下記のとおり、教師になるプロセスにおいてその都度、その時期に必要なとされる内容を、それぞれの学年に応じ講義・演習を行ってきました。

<p>[第1回] 10月21日(水) 教育実践プレ演習 「総合的なリフレクション」(山内)</p> <p>[第2回] 10月23日(金) 教職実践演習 「いじめと体罰」(松井) 「教員としての倫理観」(藤本)</p> <p>[第3回] 11月4日(水) 教育実践演習A 「教育実習を振り返って」(松井・山内)</p> <p>[第4回] 11月16日(月) 教職概論(イ) 「教職を知る 教職の魅力」(藤本)</p> <p>[第5回] 11月27日(金) 教職実践演習 「いざ、学校へ」(松井・藤本・山内)</p>	<p>[第6回] 12月17日(木) 生徒指導論A 「望ましい人間関係づくりと生徒指導」(山内)</p> <p>[第7回] 1月18日(月) 道徳教育論(口) 「子どもの心を耕す道徳の授業」(山内)</p> <p>[第8回] 1月25日(月) 道徳教育論(口) 「教育活動の『要』としての道徳教育」(松井)</p> <p>[第9回] 3月2日(水) 卒業前直前対策講座 「4月からの心がまえ」(藤本)</p> <p>[第10回] 3月17日(木) 卒業前直前対策講座 「聞く・聴く・訊く」(藤本)</p>
--	--

11月27日(金)の4年生を対象とした教職実践演習「いざ、学校へ」は、大変印象的でした。前半は、県教委各課の主任指導主事も加わり学校種ごとの講義がありました。受講生は、初めて教員として学校に向かう日々を具体的にイメージしていました。後半は、受講生が一堂に会し、交流人事の先生方からの講話を受けました。写真や手作りの工作、学級通信を示していただきながら、これまでの教職数十年間を振り返るお話に、受講生は、ますます教職への夢を膨らませていました。一言残らず聞き漏らさないぞ、という気概で熱心に傾聴する4年生の姿は、凛として頼もしくもあり、初々しくもあり、眩しく輝いていました。また、その光景を後ろで温かく見守る教育学部や附属教職支援開発センターの先生方、さらに受講生のいる他学部の先生方の姿に「オール香川大学」の一致団結した体制を垣間見ることができ、大変心強く感じました。1年生よりは2年生、2年生よりは3年生、3年生よりは4年生と、だんだん講義しやすくなると感じるのも、ある意味、教育の成果、成長の証と言えるのかもしれません。

香川大学を巣立ち、4月から教壇に立つ若い教師たちが、崇高な使命を担うことを深く自覚し、子ども一人一人としっかり向き合い、寄り添い、理解しようと努めながら、生き生きと歩んでくれることを切に願います。

第16回 学部附属教員合同研究会
研究グループ報告
研究グループ報告
第2期 教育実践集中講座 実践報告
平成27年度 センター公開講演会 報告
附属坂出小学校
第98回教育研究発表会報告
第18回 附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎
初等教育研究発表会報告
附属幼稚園研究発表会報告
教育研究発表会報告
第60回 附属幼稚園研究大会報告
退任のご挨拶
着任のご挨拶
寄贈図書

第1回

体験活動を通じた青少年の自立を目指すー当たり前のことをしっかりとー

講師：元香川県教育委員会教育長 田中壮一郎 様

平成27年8月1日(土)午後に研究交流会・第1回公開講演会を、昨年度に引き続き松楠会との共催でオリーブ・スクエアにて開催した。「教育学部と香川県教育委員会との連携を基盤に」をテーマに、ワークショップと講演が催された。当日は、小・中・高等学校や附属学校園教員、県内教育関係者、本学教員、松楠会会員だけでなく、本学の院生・学生も参加があり、参加者77名、センター教職員や講演者等を合わせて91名の満席状態となり盛会であった。今年度は、香川県教育センターのご協力も得て、各ワークショップ等で大学教員と連携して実施した。

まず、はじめまして交流として、参加者が互いに出会いのあいさつを通して交流してもらおうと、15分程度の場を用意した。高校時代や大学時代の楽しかった思い出を語りながら、学部生と現職の教員や松楠会の先輩の皆様と交流することで、笑顔があふれ、楽しい会話の機会となっていた。

ワークショップ・ポスター発表等は、「やってみよう学力向上への一歩」「ちょっと気軽に何でも教育相談」「よりよい学級経営、生徒指導をめざして」「こんなこともできるよICT活用・情報教育」の4つのコーナーを設けた。90分という時間が短く感じられるほど充実した話し合いが展開され、参加された方はとても満足されていた。特に、学生や若年の先生方と退職された元教員やベテランの先生方が話し合う光景は、本研究交流会がめざすべき姿ともいえる。

講演は、元香川県教育委員会教育長田中壮一郎様に「体験活動を通じた青少年の自立を目指すー 当たり前のことをしっかりとー」と題して、多くの資料に基づきながら大変丁寧に分かりやすく、聴衆を魅了するユーモアを交えた内容でご講演いただいた。特に、当たり前のこととするものの大切さを、不易と流行の観点から、現在勤務されている国立青少年教育振興機構での体験活動に関する調査結果等も示しながら話された。さらに、子どもの体験活動に関する内容だけでなく、道德教育から「早寝早起き朝ご飯」等の家庭教育まで、これまでに関わってこられた教育行政での幅広いご経験から、大変広い視点と深い洞察力で整理していただいた。特に、故郷香川のことを愛する心を強く感じさせていただいた。参加者からも、今回の企画に対して賞賛の声をいただき、有意義な講演会となった。

末尾であるが、開催のためにご尽力いただきました関係各位の皆様にご心より深謝申しあげたい。

※第1回講演会の記録写真は、平成28年度開催案内に併せて、本センターニュース1頁目に掲載しています。

(文責：植田和也)

第2回

学力向上を支える「教育の情報化」と授業改善

講師：和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター長 豊田充崇 先生

平成27年12月12日(土)、香川県教育センターにて第2回公開講演会を行いました。講演会では今回初めて、当センターが主催し、香川県教育センターに共催をいただき、香川県教育センターで開催する方法で実施しました。今回は文部科学省や和歌山県・市の情報教育、教育におけるICT整備等に関わる各種委員を歴任され、中学校教員の経験もある、和歌山大学教育学部附属教育実践総合センターセンター長 豊田充崇(とよだ みちたか)先生をお招きし、「学力向上を支える『教育の情報化』と授業改善」と題し、ご講演いただきました。当日は、香川県教育委員会、香川県教育センター、公立小・中・高等学校教員、大学教員・学生など計42名の参加を得て開催しました。

14時より始まった講演会では、始めに自己紹介に代えて豊田先生ご自身の教育実践や教員養成の取り組みが紹介されました。例えば、和歌山大学教育学部の模擬教室に地域の子どもたちを招き、学生が授業を行う「土曜学校での呼び込み教育実習」など、学校の枠にとらわれない教員養成の取り組みが紹介されました。続いて、ICTの教育利用、特に電子黒板やタブレットパソコンの整備と活用授業が学力向上をもたらしていることが、テスト結果などをもとに紹介されるとともに、学校現場に対する聞き取り調査の結果などをもとに、ICTの授業における活用と学力向上との間には、教師による「授業改善」「授業力・指導力の向上」が欠かせないことが語られました。

10分間の休憩を経て、後半には、香川県教育センターと当センターに整備しているタブレットパソコンを参加者に配布し、豊田先生のご指導のもと、授業で使えるアプリケーションを用いて、実際に「子どもになったつもりで、タブレットパソコンで学んでみる」演習が行われました。参加者の方々には、「QRコードを読み取って情報にアクセスする」「動画像から情報を読み解く」「手書きとデジタルを融合した学び」などを体験いただきました。また「タブレットパソコンを動かすと、その方向の様子を見ることができ工場見学」のバーチャル体験では、歓声をあげながらタブレットパソコンを周囲四方八方にかざして、あちこちを興味深げに探索する参加者の姿があちこちに見られ、「未来の学びの姿」を体感するひとときとなりました。

講演会を締め括るにあたり、香川県教育センター 所長 倉沢 均(ひとし)先生より、講師の先生への御礼の言葉とともに、この講演会を契機に、益々、香川大学と香川県教育センターが連携して、教員養成と教員研修の一体化を目指していきたい、とのお言葉をいただきました。

終了後に実施した参加者アンケート結果によれば、参加者の方から、「授業の中でどのようにICTを使うか、具体的な事例とともに紹介されていたのでよかった」「具体的な授業を念頭におきながら研修できる内容でした」

「学力テストとICT活用の関係が明確化され、大変参考になった」などの声をいただきました。参加者の皆様にとって、今回の講演会を通して、ICTの教育での活用が身近で具体的なものになっただけでなく、それら教育の情報化と学力向上・授業改善との関係を今一度整理することができた、有意義な機会になったものと思います。

(文責：松下幸司)



<研究主題>

対話を通じた「思考力」の育成（2年次）
 — 「育てるカウンセリング」を生かして、個々の考えを広げ深める授業づくり —

1 研究会の概略

平成28年1月28日(木)、29日(金)に、第98回教育研究発表会を開催いたしました。各教科及び道徳の時間、計17の授業を公開しました。また、1日目は、北海商科大学教授大友秀人先生より、「対話のある授業づくり」と題して全体講演を、2日目は、水戸部修治先生（文部科学省）、伊藤裕康先生、七條正典先生、坂井聡先生より、各専門分野において今求められる授業づくりについてのご講演をいただきました。そしてその後には、大友先生、水戸部先生、山内秀則先生（県教育委員会）をシンポジストに迎え、全体授業を基に、「対話を通じた『思考力』の育成」について、活発な話し合いが行われました。



【全体授業を基にしたシンポジウム】

2 研究内容



【全体授業（6年・社会科）】

本年は、「思考力」育成に向かう対話を、「拡散型の対話」と「収束型の対話」として設定し、学級集団の中に多様な考えが表出される教材や授業構成の要件を見だし授業づくりを行いました。また、子どもどうしの関わりを促すために、「育てるカウンセリング」の考えを生かした支援を行い、「思考力」育成へと向かう対話を促進していきました。

3 成果と今後の方向

ご参会の方々より、「対話を通して『思考力』を育成するというテーマは、今求められている『アクティブ・ラーニング』にもつながると思う。」

「『育てるカウンセリング』を生かした学級づくり、授業づくりはとても大切だと感じた。」といったご意見をいただきました。

今後は、これまでの「思考力」研究を継承しつつ、子ども一人一人の学習意欲をさらに育てる授業づくりを目指していきたくと考えています。



【子どもの関わりを促す（5年・保健）】

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎 初等教育研究発表会 報告

香川大学教育学部 附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎

2月4、5日に開催した「初等教育研究発表会」には全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の先生方には、ご指導・ご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも協力していただきました。ありがとうございました。

【附属高松小学校】

本校は、昨年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが、自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方に共感し、認め合うことであり、その過程で、共に学ぶ価値を実感していくと考えています。つまり、なりたい自分を心に描き、自分にとっての問題を認識し、仲間と共に試行錯誤しながら積極的に問題を解決していこうとする中で、自信をもち、主体的に「ひと・もの・こと」に働きかけることだといえます。

また、テーマにある「未来」とは、これから訪れる時を意味するだけでなく、子どもたちが今現在の中でもつ自己の見方・考え方を様々な価値観をもつ人々との関わりによって、よりよくしていくことであり、夢や希望をもって自己の生き方・在り方を創造していくことと捉えることができます。

そして、そのような目指す子ども像に向け、育みたい資質・能力として以下の3つを設定しました。

- 夢や憧れをもち、自律的に **学び続ける力**
- 「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に **関わる力**
- 問題を解決し、知や価値を **創造する力**

更に、そこに向かうためのカリキュラムを「知を創造する教科学習」と「価値を創造する新領域『創造活動』」の2領域から構想することとしました。また、2領域で3つの資質・能力を育むために、子どもたちが主体的に学ぶことができる授業の在り方を検討し、3つの授業づくりの「しかけ」（志向・共感や協同・有用）の重要性も確認できました。



主体的、共感・協同的、創造的に学ぶ子どもたち

さて、初等教育研究発表会では、このような新カリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて検討することによって、教員の教育観・指導観が変容し、子どもやその事実に対する謙虚さや、授業に対する誠実さを学ぶ契機となりました。今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。

【附属幼稚園高松園舎】



2月5日〈金〉「研究テーマ能動性を発揮する教育課程」のもと、本園の教育課程および指導計画について“能動性の発揮”をキーワードに見直しを図った実践を報告しました。当日は4・5歳児の保育「誕生会の日」と5歳児・2年生との幼小交流活動「もっともったのしくなるよ」を公開し、行事の意義について提案発表・討議をしました。

鳴門教育大学附属幼稚園長の佐々木晃先生の講演では科学的思考を促す幼小接続の教育課程について、実践と理論を結びつけながらの内容であり参会者からも「期待どおりの内容であった」と好評でした。

今後も、子どもたちが能動性を発揮する教育課程に基づいた保育実践に取り組んでまいります。

幼小交流「もっと もっと たのしくなるよ！」

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けると共に、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしくお願いたします。

第18回 附属特別支援学校 教育研究発表会 報告

香川大学教育学部 附属特別支援学校

期 日：平成28年1月23日（土） 8：50～16：40
内 容：全体提案、研究・公開授業、授業者と語る会、分科会、講演
講 演：「特別支援教育のための
 分かって動けて学び合う授業をデザインする」
 香川大学教育学部特別支援教育講座教授 武蔵 博文 氏
参会者：全国の教育・福祉関係者 約220名



研究主題 分かって動けて学び合う授業づくり ～「参加」を高める三つの視点～

児童生徒の「自立と社会参加」の実現には、授業の中で、自立と社会参加に必要な力や態度を確実に身に付けるとともに、そのプロセスにおいて児童生徒が主体的に活動し、他者と協働しながら自主的・自立的に学んでいくこと（＝「参加」の高い授業）が必要不可欠である。そこで、本校では、従来の授業を「活動機会・支援環境・授業展開」から見直しを行った上で、さらに「参加」の高い授業のためには、「目的意識：分かる」「遂行・活用：動ける」「協同：学び合う」の三つの視点が大切であると考え、上記の研究主題に設定し、それらを高めたり、促したりする授業改善に取り組んできた。

具体的にはまず、この三つの視点「分かる」「動ける」「学び合う」とはどのような児童生徒の姿かを整理し、職員間で共通理解を図った（図1）。そして、小・中・高各部の実践を通し、「目的意識を高めるための導入・振り返り・評価の工夫」「自立的によりよく活動に取り組むための支援方法の工夫」「集団の中での役割遂行、児童生徒同士のやり取り・協力を促進するための工夫」の重要性を見出し、それぞれに有効な支援を明らかにしてきた（図2）。

分かる 目的意識	動ける 遂行・活用	学び合う 協同
<ul style="list-style-type: none"> ・今、することが分かる ・することの流れが分かる ・授業の目標（ねらい）が分かる ・単元の目標（ねらい）が分かる ・生活とのつながり（学習内容の意図・価値）が分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の手助けがあればできる ・手掛かりを確認しながら一人でできる ・ポイントを意識してよりよくできる（例：早く、たくさん、正確に） ・場面が変わってもできる ・状況に合わせて適切な方法を考えられている 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団の中で役割を果たす（固定→状況に応じて） ・役割を介してやり取りをする ・学習の成果や結果について互いに評価し合う ・自分の意見を伝えたり相手の意見を聞いたりする ・課題解決に向けて話し合いをする

【図1 めざす児童生徒像】

分かって 「目的意識」	目的意識を高めるための 導入・振り返り・評価の工夫	動けて 「遂行・活用」	自立的によりよく活動に取り組むための支援方法の工夫	学び合う 「協同」	役割遂行、児童生徒同士のやり取り・協力を促進するための工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・導入場面において、児童生徒が活動の必要性や意味、価値を意識するための、指導者の支援方法が蓄積された。 ・多様な評価を重ねるための活動機会の設定や授業展開の工夫の仕方が明らかになってきた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・達成基準を明確にする必要とそれを児童生徒に伝えるための支援ツールの在り方が明らかになってきた。 ・理解度、携帯性、実用性を考慮した支援ツールの必要性が再確認できた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・やり取り・協力場面における児童生徒の役割の具体化・明確化の有効性が確認できた。 ・情報共有のための工夫やそれを活用するための指導者の役割が明らかになってきた。 	

【図2 研究の成果】



【図3 研究成果物】

これらの研究成果は、本年1月発行の「特別支援教育のための、分かって動けて学び合う授業デザイン」（ジアース教育新社）に本校の授業づくりの全てとしてまとめることができた（図3）。今後、これらの研究成果が、インクルーシブ教育システム構築の一助となり、各校における「合理的配慮」の参考となることを切に願う。

研究発表会に際しましての関係各位のご指導、ご協力に対して深く感謝申し上げます。



第60回 附属幼稚園研究大会 報告

研究主題 ～つながる～ 子どもたちの生活を支える

香川大学教育学部 附属幼稚園

1 研究会の概要

1月29日（金）に第60回附属幼稚園研究大会を開催し、「つながる子どもたちの生活を支える」をテーマに子どもの体験、教師の援助について、参会者とともに協議し考えを深める研究会をめざした。県内外から約250名のご参会をいただき、盛会に終わられた。

2 研究主題について

昨年までの「主体性と協同性の育ち」を取り、援助の在り方、教育課程・指導計画の再編成を基に、子ども理解・援助について追究するため、さらに今年度は、「子どもの体験」をキーとして、「探る⇒ともに生活をつくる」ことを考えた。一人の子どもの中での体験の意味やつながり、子どもがかかわる人、もの・ことを通しての体験のつながり、また、過去・今・未来とのつながりについて、子どもはどう体験をくぐり抜け、自らの生活をつくり出しているだろうか。今年度は1年次として、保育実践を通して見えてきた「体験」の意味をていねいに見とり、援助につなぐ大切さについて、改めて考える機会と研究発表を行った。

《日程・内容》

9:30～10:20 開会式・全体会・研究経過報告

10:30～12:30 シンポジウム
協議会・パネリスト討議

13:30～14:00 ポスターセッション
「あおぐみしんぶん」の取組等

14:10～15:40 講演
北海道大学大学院教育学研究院
准教授 川田 学 先生
「出来事をともにつくる保育
～どの子どもテーマをもって生きている～」



3 研究内容

目的 子どもが充実した生活づくりを行うために「体験」をどのように見取っていくかについて、個々の記録、事例研究での保育カンファレンスを大切に行う。その中で、多様な見方・考え方から見つめ直し、体験の意味を探ることを目的とした。

内容 ○子どもの遊びの中の体験をていねいに読み取り、体験の意味を探る。

○一人一人の体験の意味に目を向けた教師の援助について探る。

方法 写真やエピソードを綴った保育記録を次の観点から捉え直し、体験を見取る。

①子ども・遊びの理解 ②教師自身の振り返り ③次の保育への見通し(環境・援助等)
また、事例を通して、保育カンファレンスを行い、いろいろな見方・考えのもとで、理解を深められるようにした。

4 研究の成果

(1) 体験を探る

○目に見える形として同じように見られる遊びや子どもの姿でも、一人一人の内面により、それぞれの体験の意味の違いをもっている。それを見取る大切さを再認識した。

○体験と体験のつながりがある。時間、空間、対象によるつながりを子どもはつくり出すことで、自らの生活の充実へと歩んでいるのではないか。

(2) 教師の援助について

○保育記録と保育カンファレンスにおける視点を明らかにした教師自身の保育・援助の振り返りが体験の意味の見取り、援助の改善、環境の再構成につながることを再認識した。

○子どもの育ちの過程の「今」を「過去」とつなげて、「未来」をつないで、考えていくことが、生活を支えるためのつながりをさらに探究したい。

退任のご挨拶

■ありがとうございました

香川県教育委員会事務局義務教育課 山内秀則（前・附属教職支援開発センター客員教授）

附坂小の8年間と合わせ10年間、長きに渡りお世話になりました。特に本年度は、ご心配やご迷惑をおかけし、大変申し訳ありませんでした。七條先生をはじめ学部、センターの先生方に温かいフォローをいただいたおかげで、何とか客員としての2年間を終えることができました。心より御礼申し上げます。

また、90分間という長さへの不安から、プレゼンをぎりぎりまで作成するため（結局未消化で終わるのですが…）、印刷原稿を待つ松井さん、濱田さんは毎回やきもきされたことでしょう。ご迷惑をおかけしました。笑顔で対応していただき、救われました。

「よい授業とは」「なぜ法規を学ぶのか」「子どもの側に立つとは」「求められる教員の資質・能力とは」「学校は何をやる場所か」「子どもに学ぶとは」等々、自らの実践や教育観を改めて振り返って整理し、原点に帰るよい機会になりました。本当にありがとうございました。学部生の大いなる飛躍と、学部並びに附属教職支援開発センターのますますのご発展を心からお祈りしております。

■貴重で楽しい経験でした

松井 保（前・附属教職支援開発センター客員教授）

平成25年度から平成27年度までの3年間、教育実践集中講座のお手伝いをさせていただきました。教職支援開発センターの先生方、職員の皆様にはいろいろとお世話になりました。ありがとうございました。

一連の講座での授業は、例えば実践演習での各学部の先生方が協力しての指導の様子や、受講生の真摯な取り組みに触れることができた貴重な機会でしたし、講座のための準備は、私自身の小・中学校での教員生活や教育行政に携わった経験を改めて振り返る過程でもありました。

教職センターを中心としたさまざまな支援・指導が、今後益々充実し大きな成果をあげられますことを祈念しております。

■無上の幸福の時

藤本泰雄（前・附属教職支援開発センター客員教授）

教壇に立ち、子どもたちとともに授業を創ることを終えた身に、そこで学んだことを、これから教職に就こうと志す若者へ伝える使命を与えていただいたことは、無上の幸福でした。特に印象的な出来事だったのが、採用試験前に、形態は自主学習として、「何か尋ねたいことがあったら待機をしておくから訊きに來なさい」という時間でした。全く失礼なことに、私自身が時間を持て余すのではないかと思っていました。ところが、模擬授業や面接等の予約が休み無しに入ってきたのです。学生にとっては当たり前のことと思われるのですが、私の学生時代には考えられない真剣さや熱意を感じ、当然に嬉しく、その真面目さがちょっぴり怖かったことを覚えています。その若者の日々の指導にあたる先生方の真摯でひたむきな姿にも、いい教員が輩出されると確信を持ちました。もっと長く、この職に力を尽くしたかったのですが、今後は、また違う形で教職を目指す人たちの応援団になれたらと思います。

ありがとうございました。

■中学という山から降りたカブトムシ

櫻井佳樹（前・附属高松中学校長）

大正教養主義の古典、倉田百三『愛と認識との出発』（1921）の冒頭には、「哲学者は淋しい甲蟲である」とある。なぜカブトムシなんだろう、と疑問は残るが、そう言われればそうかも知れない。2年前の着任に当たっては鎧や兜で固めた姿で敵陣に乗り込んだからである。そして中学生という難攻不落の山の登頂を目指したのであった。この2年間、様々な戦の修羅場に於いて、笑いやユーモアという武器で攻撃を仕掛けてきた。最初は戸惑いかたくなだった生徒たちも、いつしか共に歌い踊る仲間になったのである。ああよかった。だがふと気づいたのである。自分の前にもはや山がない。別の山を探そう。ということでこの度中学校という山を降りることになりました。この間、附属高松中学校の先生方をはじめ多くの方に支えられてきました。貴重な体験をさせていただいた皆様方に深く感謝致します。

深い安らぎ酔いしれるカブトムシより。

■有り難い時間をもてたことに感謝

伊藤裕康（前・附属坂出中学校長）

副校長をはじめ教職員の方々、保護者の皆様、センター及び学部・大学の先生方、教育委員会等の関係諸機関の皆様を支えられ、4年間の校長職を全うできました。感謝です。

生徒たちのほほえましい姿から自然と笑顔がこぼれ、研究集会での先生方の発言に現場の知性を感じて嬉しくなり、楽しい時でした。広島的女子大学から香川大学に移ってほどない2004年3月19日発行の「附属坂出学園だより」No. 17に、「前任校は附属がなく、学生に授業を見させたりさせたりが難しかった。私には附属がある香大は魅力的。」と記しました。有り難いことに、私にとって附属学園は魅力的な場所であり続けています。

卒業生に、「母校とは、在校生の未来と卒業生の青春を預かる、故郷となるべき場所」と語りました。附属坂出中学校をはじめとして両附属学園に集う学校が母校として輝き続けること、附属学園に関係される皆様のさらなるご発展をお祈りいたします。

■出会いには必ず意味がある

坂出市立瀬居中学校教頭 谷本里都子（前・センター運営委員）

交流人事教員として、平成25年度から平成27年度までの3年間、香川大学に勤務する貴重な機会をいただきました。特に、1年目にはフレンドシップ事業、2年目には教育実習等にかかわらせていただき、子どもたちや学生との素敵な出会いがありました。さらに、3年目は附属教職支援開発センターの運営委員をさせていただき、学校現場での経験を生かす場も設定していただきました。附属教職支援開発センターの教職員の皆様には、様々な面で支えていただき、大変感謝しております。

私は今、坂出市立瀬居中学校の教頭として、教職員の方々とともに、子どもたちの居場所となるような学校づくりに日々、邁進しております。香川大学で勤務した貴重な経験を今後の教員生活に生かしていきたいと考えております。3年間お世話になり、本当にありがとうございました。

着任のご挨拶

■授業ができる喜び

附属教職支援開発センター客員教授 北堀 宏

5月から授業をさせていただくことになりました北堀です。中学校社会科を担当し、附属高松中を含めて中学校で20年間勤めました。教育行政に携わって通算6年目、学校現場を離れて3年目です。明日の社会を担う子どもたちに関わりたいという思いで教職の道を選んだ私にとって、現在の立場は直接子どもたちと関わることがなく一抹の寂しさを感じていました。この度、明日の教育を担う学生さんと関わる機会をいただき、力不足ながらも張り切っています。

香川県が求める教師像は、○使命感と情熱にあふれる教員 ○子どもにとって魅力ある教員 ○たくましく生きる教員です。これらの教師像とは、具体的にどのような姿として現れるのか、学生さんと共にアクティブ・ラーニングできればと思います。よろしくお願いいたします。

■香川県の先生になろう

附属教職支援開発センター客員教授 大山 修

4月から、附属教職支援開発センターの客員教員として勤務します香川県教育センターの大山修です。教職理解、教育法規等の講座を担当します。

一昨年度まで、香川県の公立中学校で28年間勤務しておりました。その学校現場での経験を、学生の皆さんにお伝えすることで、先生になりたいという思いを強くしてもらえればと考えています。

私は、香川県が大好きです。今まで、自分が受け持った生徒たちに香川県の良さ、自分のふるさとの良さを伝えたいと思っていました。ふるさとを愛する子どもを育てるには、まず先生自信がその地域を好きになることが必要であると考えます。学生の皆さんに教職のすばらしさを伝えるとともに、自分のふるさについて見直す機会となればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

■魅力ある教師をめざして

附属教職支援開発センター客員教授 岡 静子

小中学校（県立中高一貫校も含む）の教員生活を退職し、この度お世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。社会環境が大きく変化し続けている中で、子どもの学力向上や、暴力行為、いじめ、不登校などの問題行動等の多種多様な課題への対応が求められている中、その最善線にたちこどもたちを指導をする教師は、大変やりがいのあるまた、教師としての醍醐味がある職業です。教師は、まずは、子どもたちが、元気で安心して落ち着いた雰囲気の中で学校生活や学級生活を送ることができるようにすることです。子どもたちの夢と笑顔を大切に香川の教育に多くの学生の皆さんが採用されて、学校教育が直面する様々な課題に適切に対応できるよう、今までの経験を生かし、少しでもお役に立てるようがんばっていきたくと思います。センターの皆様にはご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

■歴史と伝統を咀嚼しながら更なる充実へ

附属高松中学校長 時岡晴美

この度、平成28年4月1日付で附属高松中学校長として勤務することになりました時岡晴美です。香川大学に着任してから29年になりますが、この20年ぐらいいは人間発達環境課程を主担当としていましたので、附属校へは殆ど伺う機会がなく過ごして参りました。まずは、高松中学校について様々に学習するところから始めています。まだ僅かな期間の勤務ですが、教育体制や教育目標について理解を深め、先生方の取り組みとチームワークに感嘆するとともに、生徒の様子や附属学校生としての個性や特徴が少し見えてきたところです。保護者やOBの方々をはじめ、地域からも大きな期待が寄せられていることをあらためて実感し、歴史と伝統を私なりに咀嚼しながら継承すべく気持ちを新たにしています。私自身の研究テーマとして、最近では学校と地域の連携について調査研究と実践に取り組んで来ましたので、何らか役立てられないか思案しているところです。

今後は、生徒の教育環境の向上に尽力することはもちろんですが、先生方が元気に楽しく活動され、更に教育の質を高められるよう、私も共に努力して参りたいと存じます。各附属学校園、大学との連携は、今後も一層求められておりますので、皆様からも一層のご支援ご協力を賜りますよう宜しくお願い致します。

■よろしくおねがいします

附属坂出中学校長 高木由美子

この度、平成28年4月1日付で、附属坂出中学校の校長として勤務することになりました。本校は私にとって母校です。年度末には、校庭の日時計や四国を模した中庭などを見ながら、在学当時のことを懐かしく思い出すとともに、送別芸能祭を拝見し、伝統が脈々と受け継がれていることに感慨深いものがありました。4月から早速たくさんの行事が始まります。まだまだ、至らぬところばかりで、幾許のこともできないと思いますが、国際、化学というキーワードで附属坂出中学校を盛り立てていけたらいいと考えています。坂出は位置的に高松から離れていることもありますが、今後さらに発展するためには各附属学校園、大学との連携はますます必要になってくることと思われます。微力ながら出来るだけのことをしたいと気を引き締めますとともに、大学の先生にもご支援ご協力よろしくお願ひいただけたらと思っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

■お世話になります

附属教職支援開発センター事務補佐員 松本 愛

平成27年12月1日より附属教職支援開発センターの事務補佐員としてお世話になっております。大学の仕事は初めてで不慣れなことばかりですが、皆様に丁寧にご指導いただき感謝しています。ご迷惑をおかけすることが多いと思いますが、一日も早く仕事に慣れ、皆様のお役にたつことができるよう頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

寄贈図書(2015/09/16~2016/04/15)

教育実践研究 第41号 平成27年10月	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第15号 2015年	国立大学法人 横浜国立大学
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第10号 平成27年12月	富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
大阪大谷大学 教職教育センター紀要 第6号 2015年3月	大阪大谷大学教職教育センター
甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要 第8号 2013.3	甲子園大学 発達・臨床心理センター
甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要 第9号 2014.3	甲子園大学 発達・臨床心理センター
山形大学 教職・教育実践研究 第11号 2016年3月	山形大学地域教育文化学部附属教職研究総合センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No.30	鳴門教育大学 地域連携センター
東京学芸大学 教育実践研究支援センター紀要 第12集 2016年3月	東京学芸大学教育実践研究支援センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 研究年報 Vol.15 2016.3	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター 第16回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム 「21世紀型学力」と教師の役割	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
香川県立五色台少年自然センター自然科学館 研究報告 第41巻 2016	香川県立五色台少年自然センター自然科学館
花園大学 心理カウンセリングセンター研究紀要 【第10号】 2016	花園大学 心理カウンセリングセンター
福井大学教育実践研究 第40号 2015	福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
文部科学省初等中等教育等振興事業委託費による委託事業 現職教員の新たな免許状取得を促進する講習等開発授業 成果報告書 平成27年度	鹿児島大学教育学部
岐阜大学教育学部 特別支援教育センター年報 第23号	岐阜大学教育学部附属特別支援特別支援教育センター
教育実践総合センター紀要 No.33 2015	大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート 第35号 2015年12月	大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター
国立特別支援教育総合研究所 研究紀要 第43巻 平成28年3月	独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
群馬大学教育実践研究 第33号 2016年3月	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
立正大学 臨床心理学研究 第14号 2015年度	立正大学心理臨床センター
平成27(2015)年度 「子どもとのふれあい体験」 実施報告書 平成28年3月	富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター
教育実践総合センター研究紀要 第40号 2015年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター研究紀要 第41号 2016年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
学部・附属教育実践 研究紀要 第14号 2015年3月	山口大学教育学部
学部・附属教育実践 研究紀要 第15号 2016年3月	山口大学教育学部
東京家政大学附属臨床相談センター 紀要 第十六集 2016年3月	東京家政大学附属臨床相談センター
教育実践総合センター紀要 2016.3 第15号	長崎大学教育学部附属教育実践総合センター
中等教育研究紀要 第62号 2015	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第29号 2015年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
次世代教員養成センター研究紀要 第2号 2016.3	奈良教育大学 次世代教員養成センター
パイディア 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 Vol.24 2016	滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
高知大学 教育実践研究第30号 2016年3月	高知大学教育学部附属教育実践総合センター
静岡大学教育実践総合センター紀要 2016	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター

第16回 学部附属教員合同研究会
研究グループ報告

研究グループ報告

第2期 教育実践集中講座 実践報告

平成27年度センター公開講演会 報告
附属坂出小学校
第98回教育研究発表会報告

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎
初等教育研究発表会報告
第18回 附属特別支援学校
教育研究発表会報告

第60回 附属幼稚園研究大会 報告
退任のご挨拶

退任のご挨拶
寄贈図書

教職支援開発センター活動報告(2015/09/21~2016/04/20)

<平成27年度>

9月24日(木) 第87回 国立大学教育実践研究関連センター協議会

10月19日(月) 第六回 専任会議
10月21日(水) 教育実践プレ演習第四回全体指導
教育実践集中講座(第二期1回目)

10月28日(水) 教育実践演習第六回全体指導
11月4日(水) 教育実践演習第七回全体指導
11月16日(月) 第七回 専任会議
教育実践集中講座(第二期2回目)

11月27日(金) 教育実践集中講座(第二期3回目)
12月9日(水) 第三回 編集会議
12月12日(土) 第二回 公開講演会
12月14日(月) 第八回 専任会議
12月17日(木) 教育実践集中講座(第二期4回目)

1月6日(水) 第四回 編集会議
1月18日(月) 第九回 専任会議
教育実践集中講座(第二期5回目)

1月25日(月) 教育実践集中講座(第二期6回目)

2月15日(月) 第十回 専任会議
2月16日(火) 第88回 国立大学教育実践研究関連センター協議会

2月23日(火) 第二回 実地教育推進部門会議
第二回 教育開発推進部門会議
第二回 教職支援推進部門会議

2月24日(水) 第二回 教職支援推進部門会議
2月29日(月) 第十一回 専任会議
3月1日(火) 第16回 学部・附属学校園教員合同研究集会
3月2日(水) 教育実践集中講座(第二期7回目)

3月4日(金) 第三回 運営委員会
3月14日(月) 第十二回 専任会議
3月17日(木) 教育実践集中講座(第二期8回目)

<平成28年度>

4月7日(木) 教育実践演習第一回全体指導
4月13日(水) 特別支援教育実践演習全体指導
4月14日(木) 教育実践演習第二回全体指導
4月19日(火) 第一回専任会議
4月20日(水) フレンドシップ事業オリエンテーション

教育実践総合研究(第33・34号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第33号は**5月31日(火)**原稿受付締切、
第34号は**11月30日(水)**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

(1) 採録

(2) 条件つき採録

(3) 返戻

8 (校正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。

その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。

平成28年度、本ニュースは春期(4~5月期)・秋期(10~11月期)の年2回の発行を予定しております。また、最新の情報は当センターホームページに掲載してまいりますので、併せてご参照いただけましたら幸いです。(URLは右記のとおりです。)

なお、本号(第2号)は編集の関係上、当初発行予定を約1か月ずらして発行させていただくことになりました。心よりお詫び申し上げます。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 2)

発行日 平成28年5月20日 代表者 七條 正典

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/



CEDS_Tel&URL